

静岡の未来を拓く
「高校生及び大学生の活動報告」
High School Student and
University Student Activity Report

座 長

Chairperson

井島 秀樹（静岡県教育委員会 高校教育課 指導第1班長）

Hideki Ijima (Assistant Director, Shizuoka Prefectural Board of Education)

森本 達也（静岡県立大学 薬学部 教授）

Tatsuya Morimoto (Professor, School of Pharmaceutical Sciences,
University of Shizuoka)

静岡の未来を拓く「高校生及び大学生の活動報告」(高校生部門)

No.	学校名	所属(クラブ名等)	氏名・学年	発表タイトル
1	静岡市立清水桜が丘高等学校	生徒保健委員会	石橋 舞花(2年)、佐野 衣智(2年)、面村 恵(1年)	清桜生のストレスと対処について
2	静岡県立清水東高等学校	SSH課題研究	西川 桃子(2年)、村松保乃加(2年)、清水 彩佳(2年)、増田 有華(2年)、西ヶ谷珠稀(2年)	モンモロロナイトを用いたデカフェ緑茶の作製
3		自然科学部 地学班	菊池 悠月(2年)	興津川の岩石
4	静岡県立駿河総合高等学校	3年福祉科目選択者有志	森田 真依(3年)、麻田 亜美(3年)、松浦 葵(3年)、柴田 彩希(3年)	私たちが地域でできること
5	静岡県立掛川西高等学校	自然科学部	吉村 真侑(1年)、岡田 弥咲季(1年)、杉原 慶(1年)、伊藤 大悟(1年)、島田 莉乃(1年)、杉山 賢大(1年)、花井悠太郎(1年)、山本 一輝(1年)、山本 透馬(1年)、二村 錬(1年)、岡田 瑛士(1年)	環境DNAを用いた淡水魚の生息域調査
6	静岡県立浜松湖東高等学校	(生徒5人)	新保 柚季(2年)、佐久間大和(2年)、平良 陸(2年)、郡山 尊(2年)、古橋 雪輝(1年)	過去から未来

1

発表タイトル	清桜生のストレスと対処について
学校名	静岡市立清水桜が丘高等学校
グループ等 名称	生徒保健委員会
参加学生名 (学部・学年) 氏名	石橋舞花(2年)、佐野衣智(2年)、西村 恵(1年)
要 旨	<p>昨年、校内アンケートを行ったところ、約7割の生徒が「授業に集中できない」と答えていた。その原因がストレスにあるのではないかと仮定し、今年度、全校生徒を対象にストレスについてのアンケートを行った。本校生徒のストレスを感じるときはどんなときか、身体に出る症状、どんな感情になるか、対処法の実態、基本的な生活習慣などを調べた。</p> <p>ストレスなどの負荷を跳ね返すカーレジリエンスーに着目し、レジリエンスを高める取り組み、清桜生に必要なと思われる、実現できそうな取り組みについて保健委員が考えた。質の良い睡眠・スマホの効率的な使い方・ものごとの捉え方・誰かに相談する、この4つの事柄について全校生徒に提案をした。</p>

2

発表タイトル	モンモリロナイトを用いたデカフェ緑茶の作製
学校名	静岡県立清水東高等学校
グループ等 名称	SSH課題研究
参加学生名 (学部・学年) 氏名	西川桃子(2年)、村松保乃加(2年)、清水彩佳(2年)、増田有華(2年)、 西ヶ谷珠稀(2年)
要 旨	妊婦がカフェインを多量摂取すると、胎盤を通じて胎児に影響が及び早産・流産を招くことを知り、日頃から飲む緑茶に含まれるカフェインを除去できれば、妊婦も安心して緑茶を飲むことができると思い研究を始めた。先行実験で天然吸着剤であるモンモリロナイトを用いることでカフェインを除去できることを検証していたため、モンモリロナイト質量あたりにおけるカフェインの吸着量を、緑茶の温度・モンモリロナイトと緑茶の接触時間などの条件を変えながら調べている。最終的に家庭でより、簡単にカフェインを除去する方法を提案することを目標にしている。

3

発表タイトル	興津川の岩石
学校名	静岡県立清水東高等学校
グループ等 名称	自然科学部 地学班
参加学生名 (学部・学年) 氏名	菊池悠月 (2年)
要 旨	目的：河川の礫から、自分の住む地域の地質を考察し理解を深める。 方法：興津川の数か所から礫を採取し、分類する。 結果：流域で過去に起こった複数回の火山活動とその順序を考察した。 地層が海底にあった時の活動の痕跡を発見した。

4

発表タイトル	私たちが地域でできること
学校名	静岡県立駿河総合高等学校
グループ等 名称	3年福祉科目選択者有志
参加学生名 (学部・学年) 氏名	森田真依(3年)、麻田亜美(3年)、松浦 葵(3年)、柴田彩希(3年)
要 旨	福祉、介護に興味がある生徒が選択している授業の中で学習したことを、地域の中で実践できないかと考え取り組んできた様子を紹介しながら、私達にできる地域福祉とは何かを考えてみました。

5

発表タイトル	環境DNAを用いた淡水魚の生息域調査
学校名	静岡県立掛川西高等学校
グループ等 名称	自然科学部
参加学生名 (学部・学年) 氏名	吉村真侑 (1年)、岡田弥咲季 (1年)、杉原 慶 (1年)、伊藤大悟 (1年)、 島田莉乃 (1年)、杉山賢大 (1年)、花井悠太郎 (1年)、山本一輝 (1年)、 山本透馬 (1年)、二村 錬 (1年)、岡田瑛士 (1年)
要 旨	環境DNAとは生物が環境中に放出する微量のDNAで、老廃物や皮膚片などに含まれている。これを検出することができれば、その生物が生息していることが捕獲せずに確認できるというものである。本校ではDNAの検出方法としてPCR法を校内で行うことが可能であるため、これを利用し、淡水魚の生息域調査を行っている。今回は昨年度から取り組んでいるヤリタナゴに加え、外来種であるタイリクバラタナゴの同時検出を試みた。またフナも、近年減少傾向にあるフナについても調査を行うことにした。3種の検出系を確立し、静岡県西部の河川で調査を行い、浜松市都田川でヤリタナゴの環境DNAを検出した。

6

発表タイトル	過去から未来
学校名	静岡県立浜松湖東高等学校
グループ等 名称	なし
参加学生名 (学部・学年) 氏名	新保柚季(2年)、佐久間大和(2年)、平良 陸(2年)、 郡山 尊(2年)、古橋雪輝(1年)
要 旨	静岡の未来で避けられないとされる南海トラフ地震。それに対する高校生の意識・理解に関するアンケートと、被災地研修での経験をもとに現在の静岡の高校生に足りないものは何かを探り、問題点を洗い出し、解決への取り組みを考察します。

静岡の未来を拓く「高校生及び大学生の活動報告」(大学生部門)

No.	大学名	参加者氏名(学部・学年)	発表タイトル
1	静岡県立大学	江部綾華(薬学部 5年)	大規模災害に備えた静岡県立大学での取り組み
2	静岡県立大学	杉山優雅(薬学部 5年)	医療連携演習に参加して学んだこと ～薬学部生の視点から～

1

発表タイトル	大規模災害に備えた静岡県立大学での取り組み
大学名	静岡県立大学
所属 (学部・講座等)	薬学部 分子病態学分野
参加学生名 (学部・学年) 氏名	江部綾華 (薬学部 5年)
要 旨	<p>近年、地震や台風といった自然災害等が頻発する中、災害の現状、原因及び被災等について理解を深め、備える、いわゆる防災教育が求められている。静岡県立大学では、東南海を震源とする地震災害の発生に備えて、「静岡の防災と医療」を一般教育科目として配し、医療従事者目線からの防災教育をカリキュラム内に組み込んでいる。さらに、上位学年では、薬学部生と看護学部生が合同で、静岡県地震防災センターにて防災教育実習実施している。この実習では、両学部生の混合チームを結成し、イメージTENや避難所運営ゲームを通して災害時の緊急対応を学ぶほか、薬学部生・看護学部生、一学生として災害時に出来ることをディスカッション、発表を行っている。今回、このような大学生が主体となった取り組みを通して学んだ、災害時に適切に対応する能力、大学生が行える地域貢献について紹介する。</p>

2

発表タイトル	医療連携演習に参加して学んだこと ～薬学部生の視点から～
大学名	静岡県立大学
所属 (学部・講座等)	薬学部 分子病態学分野
参加学生名 (学部・学年) 氏名	杉山優雅 (薬学部 5年)
要 旨	<p>医療や地域包括ケアにおける連携について、実習や演習を通して、学生のときに実践的に学ぶことが、将来の地域医療の向上にとって重要であると考えられる。静岡県立大学薬学部では、薬学部5年時に症例検討を基に、管理栄養士でもある本学の大学院生と一緒に連携演習を行っている。この演習では、症例検討を通して、患者に対する様々な情報を収集整理すると共に、多様な職種の役割を理解し、グループでディスカッションを行うことで、患者主体による多職種連携の必要性を学んだ。</p> <p>具体的には、まず病院へ患者が搬送されてきた際の情報収集から、医療チームの検討といった急性期の「治療主体」の考え方と、その後、食べたいと患者から発語があり、言語聴覚士や作業療法士など生活支援に関わる職種の役割や考え方を学びながら、学生も専門職としての役割を考えつつ退院支援を検討する、慢性期の「生活者のQOL主体」の考え方である。</p> <p>今回は、そのカリキュラムを紹介すると共に、学生としての視点で、学外実習との関係性や、演習を通しての学びや気づきを報告する。</p>